

# 立正安国論の研究

田 中 生 明

録外才三安国論御勘由來に曰く

「正嘉元年太蔵  
丁巳

八月二十三日戊亥の時先代未聞の大地  
震同く二年八月一日大風同く三年飢饉正元元年巳  
未大疫病  
等……」

四季に亘りて大瘡やまず万民大半に超えたので日蓮は世間の様を見、一切経を研讀され四間年の月日を費し著作されたのがこの立正安国論である。本論は文応元年（一二六〇）七月十六日屋戸野入道を付して古最明寺入道殿に呈出されたものである。立正安国論といえ、日蓮の御遺文全に於いても尊い文章である。

## 一、安国論著作由来

先ず安国論を著作された縁由は

「天変地天飢饉疫病遍く天下に満ち、広く地上に迸り。

牛馬巷に弊れ、骸骨路に充てり。」

という様な訳である。更に曰く。

「国亡び人滅びなば、仏を誰か崇むべき、法を誰か信ずべきや、先づ国家を祈りて須く仏法を立つべし。」と日蓮は著作由来について本文に述べている。

日蓮本論を書かれたのは三十九才の時である。併しその時には立正安国の論旨に就いて懷抱せられたる全体を尽してはおられないのである。正法とはどのようなものであるかを明らかにするについても、又人の心を如何に統一するかについても未だ尽さざる所がある。故に立正安国論という表題は一冊であるけれども、御遺文全体を総括して立正安国論といつてもよいのである。正法を立てるのは何の為かといえ、行いは国家を安らかにするにある。日蓮は開目鈔の中に、

「日蓮は日本の柱とならん」と誓われている。斯くの如くに安国の意を宣示され又曰く本尊鈔中に、「一闍浮提才一の本尊この国に立つべし」と示される。これが又立正安国の宣言である如く立正安国論は日蓮一代の思想を貫いているのである。

「汝早く信仰の寸心を改めて速に実乗の一善に帰せよ」

と立正安国論文中にある通り小さな思想ではなく、宗教も道德も生活も、一切を一つにして、立派な精神になつて一人としては全き人格を備えなければならぬ意味に於いて立正安国論を日蓮は主調したのである。

## 二、安国論に於ける付文と玄意

付文というのは御文章に現われている表面の意味合を取ることであり、玄意というのは、その御文章を通して日蓮の真意に触れることである。付文からみれば、災難をはらうことに最も重点を置かれ、警告の大文字を連ねている。しかしその玄意を見れば開目鈔や観心本尊鈔に示すが如く、

「雨の狂きを見て竜の大なるを知り、花のさかんなるを見て、池の深きを知る」ことであり、斯かる大事態が生ずるといふことは正に大聖が出現して仏法の正義を現わし、深き信念があらせられ自から任じて起たれるの意気が拝されるのである。しかるに日蓮の真意は文上には法然の選択集を挙げて邪とし之を「一凶」としてかゝげられているが、日蓮は単なる浄土宗だけではなく、当時

鎌倉幕府の下に迎合して唯寺門の發展や名利に慣れて居るところの個人解脱の新興仏教、念仏、壇二宗に対する折伏であり、律国賊、真言亡国を攻撃している。法然選択集を挙げたのは、それだけ法然の念仏が勝れていたと解釈せざるを得ないことと、わかり易い一般民衆仏教であつたかもしれない。

## 三、本書の主眼

本書の主眼は、仏法と国とに於いて其の誤れるものを破邪し顕正して実乗の一善即ち宗教、道德、哲学、思想等一切のことを融合統一せられたところの大明を炫に建設せられようというところに日蓮の本意並主眼があるのである。

## 四、本書の内容

本書は十節に亘る内容の問答によつて組織されてある。本書冒頭に「旅客来り嘆いて曰く」というその客とは行脚政治を行つて民心を収攬しこれを称して善政といわれている北条時頼を示すのである。この客に対して日蓮が答えられる問答体を以つて九節まで進み才十節で客が了

解をして邪を捨て、正に帰すると云う一節で本論は終つてゐるのである。

最後に日蓮に対する立正安国論は法然に対する選択集と私は同じ傾向のものではないかと思う。一切経を研讀することは両者には違わず自分の主張することが経典から一致しないだけである。釈尊の御教えに相違ないことはいうまでもない。安国論は斯くの如き時代に斯くの如き日蓮が斯くの如き政府者に向うて注ぎし建白書である。

## 日本に於ける地藏信仰について

——特に六地藏を通じて——

浜 本 昭 良

我が国の仏、菩薩の中に於いて、今日の我々にも、なお一種の親しみを感じさせるものは、俗に「お地藏さん」と呼ばれる地藏菩薩であることは顕著な事実である。この事実から、少なくとも、最近の生活意識の中に、地藏に対する信仰が生きているといつても過言ではない。そ

れは何が故に、或いは、どういう意味をもつて、この様に、一般民間人の精神生活の中に、広く浸潤するに至つてゐるのか。又、これは古く大陸（中国の宗教界）に於いてもあつたものであるが、日本人の信仰の中に入るに至つてどういふ特色をもつて受け入れられ、広められたのであろうか。

この問題を考察するにあつて、現存の様々な変貌した地藏信仰の実態を見る時、たと單に、歴史的に、仏教々義上の地藏の本質的性格を尋ねて、その性格の故に、或いは、その性格のもつ意味においてだけ、日本にも広められたとは解することの出来ないものがある。

例えば我が国の六地藏信仰であるが、特に京都の六地藏は有名である。六地藏の名が我が国での初見は元享訳書十七や今昔物語集十七によると、長徳四年（九九八）四月、周防国の玉祖神宮司惟孝（高）が病みて、氣絶している時、夢中に六地藏を感じし、蘇生後、一字を造つて、彫刻安置したといひ、又、拾遺往生伝下では藤原経実が夫人の為に造立したともいわれる。更に源平盛衰記